

# とらい

No.47



膳所高等学校ラグビーオールドボーイズ倶楽部

## とらい 目次

OB 会長あいさつ	.....	1
学校長あいさつ	.....	2
保護者会長あいさつ	.....	4
監督あいさつ	.....	5
楯円球にかけた青春	.....	6~12
現役主将のことば	.....	13
2024 年チーム戦績	.....	14

## 「現役と OB の交流を増やそう」

膳所高校ラグビー班 OB 倶楽部会長 南池 直樹

会長を務めることになりました昭和 57年(1982 年)卒業の南池直樹です。よろしくお願ひします。まずは退任される小野田会長ほか役員の皆様の OB 会の運営における長年のご尽力に深く感謝します。

現在の膳所高校ラグビー班の状況は非常に厳しいものがあります。部員の皆さんは、3年間という限られた期間を学業に励みつつ、ラグビーに真摯に取り組んでいます。そのラグビーにかける情熱には疑いはありません。しかしながら、部員不足により大会への単独参加は厳しいのが現実です。

こんな時こそ、我々 OB が現役部員を物心ともに支える必要があると思います。そのためにも、これまで以上のご支援、ご意見をお願い申し上げます。特に、会費の納入や寄付への協力をお願いします。

私は、この膳所高校でラグビーに出会い、以来 50 年近く楕円のボールを追ってきました。(最近、ボールに触れる機会もめっきり減ってしまいましたが)

この 50 年間で、ラグビースクールや中学校などすそ野は広がりましたが、この膳所高校でラグビーに初めて出会った人も多いと思います。ラグビーに出会い、ラグビーの楽しさを知る。その場所を提供し、その思い出を守るためにも OB の皆様も力を合わせる必要があります。

この3年間は、OB 会としてマスターズ花園に参加したことにより、現役部員との合同練習などを通じて OB、現役の交流の場が増えました。このような機会を活用して、OB の皆様の意見を聞き、現役との交流を深め OB 会の活動を活性化してまいりたいと考えています。

会員の皆様のご理解とご支援を重ねてお願いして就任の挨拶とさせていただきます。

## 「ラグビーを通して、君たちは何を見るのか」

### ～自身で考え、新しい発想で考えるその先に～

校長 横井 正弘

ラグビー班OBの皆様ならびに保護者の皆様、平素は本校ラグビー班の活動への御支援を賜り、誠にありがとうございます。膳所高等学校の職員を代表しまして心からお礼申しあげます。

さて、先日、北九州で行われたリポビタン D チャレンジカップ 2025 では、日本はウェールズを相手に 24 対 19 で 12 年ぶりの勝利をもぎ取りました。ラグビー日本代表応援サイトを見てみると、「あの日の熱狂を越えていこう」という言葉が掲げられていました。「あの日」とは？ 皆さんなら、きっとおわかりですね。

また、この試合の数日前に、NHK の番組「新プロジェクトX～挑戦者たち～この国には誰にも知られず輝く人々がいる」でラグビーが取り上げられており、「ミスターラグビーがつないだ魂のパス ラグビーワールドカップ 2019 日本大会」というタイトルで、2019 日本大会で日本代表が成し遂げた歴史的快挙とそれにつながる日本ラグビー界の軌跡と挑戦が描かれていました。視聴した人もいるかもしれませんが、その概要は次の通りです(番組HPから引用)。

「日本中が熱狂に包まれたラグビーワールドカップ 2019 日本大会。日本代表は、強豪国を次々と撃破し、初の決勝トーナメント進出を成し遂げた。かつて『極東のラグビー弱小国』とバカにされていた日本は、ミスターラグビー平尾誠二の大胆な改革、そしてワールドカップを日本で開催しようという人々の情熱で変貌していく。病に倒れながらも日本ラグビーのために尽くした平尾のパス。日本大会成功の裏にあった知られざる物語」

ラグビー日本代表の軌跡と挑戦を振り返りながら、ミスターラグビーと称された平尾誠二さんの姿から私が感じたことを皆さんに伝えたく思います。

平尾誠二さんは、現役時代は華麗なサイドステップで相手を抜き去るトライゲッター、そして冷静な判断でチームを勝利に導く司令塔として大活躍し、また引退後は日本代表監督として、柔軟かつ大胆な発想と実践でチームを世界レベルまで押し上げた人物です。平尾さんは中学校入学と同時にラグビーを始め、さまざまな人と出会い、高校時代には全国制覇を成し遂げ、大学生で日本代表に選ばれるとともに大学ラグビー選手権で史上初の3連覇を達成しました。

ラグビー日本代表に目を向けてみると、今や世界の強豪たちと堂々と渡り合うブレイブ・ブロッサムズ(ラグビー日本代表の愛称)ですが、1995 年の第3回ワールドカップでは世界最強といわれるオールブラックス(ニュージーランド代表)に 145 対 17、128 点差で大敗を喫します。この大敗は衝撃的で、日本国内でもラグビー人気は急落してスタジアムからは観客の姿は消えました。

そんな暗い時代のまっただ中の 1997 年に平尾さんは日本代表監督となったのです。「世界で勝つには変化が必要だ」と考えた平尾さんは世界でも先進的なゲーム分析や指導法等を取り入れ、平尾さんや大敗を味わった選手たち、日本ラグビーを強くしたいとの熱い思いを抱く多くの関係者がチームの強化に乗り出します。そして 1999 年のワールドカップ直前にはテストマッチ(パシフィック・リム選手権)で優勝します。

ワールドカップの初戦ではサモアに完敗しますが、それはオールブラックスに大敗した時とは異なり、

世界との差が縮まった、自分たちは進化している、と選手自身も実感できるものだったと私は考えます。

残念ながら、進化途上にあつた日本代表は世界にはまだ及ばず、1999年のワールドカップは一次リーグ全敗となり、その後の海外での試合も連敗が続いて2000年に平尾さんは監督を辞任しました。

その後も日本代表の挑戦の日々は続き、2015年イングランド大会での南アフリカ戦では、エディー・ジョーンズさんをヘッドコーチに迎えて日本代表は勝利をつかみ、世界中を驚かせました。その様子を、末期がんと闘う平尾さんは病床で見守っていました。そしてエディー・ジョーンズさんの次の監督について関係者から相談を受けた平尾さんは、迷わずジェイミー・ジョセフさんを推薦します。

ジェイミー・ジョセフさんは、かつて日本が大敗を喫した相手、オールブラックスの出身であり、また日本ラグビーを知り尽くした人物でした。平尾さんは「ジェイミーを信じて、選手自らが考えないと、(日本は)世界で勝てない」と繰り返し語り続け、2016年10月に亡くなりました。

平尾さんの人生は、ラグビー人生は、柔軟な発想で新しい可能性に挑戦し続けるものだったと私は考えます。そしてその姿勢や信念、ことばや実践が人を動かし、方向性を一にして切磋琢磨できる仲間をつくり、組織を動かしました。彼の思いは後に続く人たちに受け継がれ、体格や属性に関係なく仲間を信じて助け合い、一つのチームとして戦う「ワンチーム」を合言葉にするラグビー日本代表は挑戦と進化を続けています。

現在、本校でラグビーに打ち込む皆さんは、ラグビーを通して何を見つけようとしているのでしょうか。何を見つけることができるのでしょうか。その先に何を見るのでしょうか。そう皆さんに問いかけ、そして平尾誠二さんのことばを贈って結びとします。

「常に新しい場面が自分の前に登場するわけですから

それに対して自分がどう対応して行くのかというのは

常にあたらしいものの発想で考えて行かなきゃ行けない」

(NHKアーカイブス あの人に会いたい File No.490 平尾誠二 より)

最後になりましたが、ラグビー班OBの皆様方のますますの御活躍と、膳所高校ラグビー班の一層の発展を祈念いたしまして、簡単ではございますが巻頭の挨拶とさせていただきます。

## 「一期一会の出会いとして」

令和6年度保護者会会長 田中 千佳子

まさか自分が膳所高校ラグビー班の保護者会の立場で文章を寄せる機会があるとは思ってもみませんでした。息子は、高校2年生になる少し前にラグビー班に入りましたが、彼が部活動をしたいと思っているとは全く想像しておらず、他の兄弟たちのように、帰宅部で高校生活を過ごすのだらうと思っていました。

彼は、中学時代はハンドボールをしており、背は高い方ですが、細身でラグビーには縁がなさそうな体格。怪我が何よりも心配で、試合も最初は、恐る恐る見に行くといった感じでした。

しかし、実際に、試合の中で高校生の子どもたちが生身でぶつかりあい、必死にボールを追いかけている姿を目にしたときに非常に心が動かされました。大人も子どももスマホ一つで情報を入手して、他人と関わらなくても生活していける社会の中で、今の高校生たちが感情をむき出しに、仲間と一緒に必死に闘う姿は、とてもまぶしく新鮮に映りました。その姿は、過去には自分にもあったのかもしれませんが、うらやましく、すばらしい経験だと試合を見に行くたびに思うようになりました。怪我についても、そうならないようにしっかりと食事をとり、トレーニングをして身体をつくっていけばいいのだと思うようになりました。

また、子どものラグビーの活動を通じて、保護者の方々と一緒に応援したり、合宿のサポートができたことは、自分も班活動に参加していると感じる楽しい時間でした。息子の新しい一面を教えてもらったり、高校に関する情報交換をしたり、高校生の子をもつ親同志の貴重な交流をもつことができ、保護者の皆さんにも感謝しています。

昨今、少子化の影響で、試合に必要な15人の人数もなかなか集まらない状況となっしまい、令和6年度は、膳所高校の単独チームではなく、合同チームとなりました。班活動も新たな局面を迎え、今までとは、違う活動の仕方や応援となることで、子どもたちも保護者も戸惑うこともありました。

しかし、膳所高校の仲間と一緒にラグビーをする楽しさやラグビーというスポーツの魅力は何も変わっていないと思っています。私たちは、これからも時代の波の影響で変化しながらも、膳所高校ラグビー班に脈々と受け継がれる部分を信じていけばいいのかなと感じています。

息子は途中入班で、他の人より活動期間が短く、本人はもっとやりたかったのではないかと思います。すがすがしい仲間や先輩と出会うことができました。これからの彼の人生の中で大きな財産になっていくと思います。

あらためて、ご指導ご支援いただきました先生、コーチならびに OB 倶楽部の皆様に心より感謝を申し上げます。皆様のご健康と今後のご活躍をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

## 「変化」

監督 森 祥太郎

膳所高校ラグビー班 OB の皆様、いつも応援ありがとうございます。

さて、私が監督に就任してから早いもので7年が経過しました。そこで、7年前と今とで何が変わったかを、現場で定点観測をしてきた者の肌感覚を通じて少しお話したいと思います。

まず、Z.R.F.C.の選手やマネージャーについてですが、何か連続する線的なものとしての変化は見えない、という結論になります。早くもすみません。

ただ、ここ数年で学年間の隔たりは、良くも悪くもなくなってきた、先輩・後輩という関係は希薄になってきた、そのように感じます。これについては、少し寂しいですが、一学年あたりの選手数が10人を切るようになって久しく、一学年あたり5、6人であることが大きな理由かと思われれます。

レギュラー争いはない。むしろ、初心者の1年生であっても、夏合宿の段階ではチームの代表として上級生とともにプレーすることが要求される。プレー中はメンバーとして対等にコミュニケーションを取る必要がある。これらは様々な点で過酷なことですが、現状です。

こうなった当初は、学年問わず前後半闘い抜く心身のタフネスが重要だと考え、練習でも「ハードワーク」(エディ・ジョーンズ氏がスローガンとして掲げていたのに便乗)を選手に求めてきました。しかし、少し違うな、というか「ハードワーク」についての解釈の問題があるな、と思い始めたのがここ数年です。

端的に言うと、「ハードワーク」を、指導者が選手に求めるのではなく、選手自身が求めなければならぬ、と。そのために重要なこととして、選手が主体的に行動するということがあります。これはスポーツ界では長年言われ続けていることですが、私の中では抽象的な理念として放置していました。

そこで始めてみたのが、学生コーチシステム。大学レベルでは当たり前となっていますが、高校ではどうか？ Z.R.F.C.でならできるとも思えない、と考え安易に導入してみたものの、もどかしい思いばかり募ります。練習プログラムにおけるキーファクターの説明、声かけのタイミング、効率化……。挙げだすと気になることばかりで、つい口出ししては結局私がワンマンに指導。その繰り返し……。

私がこのような中途半端な態度と心構えだったもので、キャプテンの池田には理不尽な要求と負担とをかけてしまったと思います。ごめんなさい。

これではいかんと思い、レビューの機会と選手に質問の機会を与えること、課題へのタイムリーな指導ができるように指導者が学生コーチに声かけをすること、指導者、選手ともども安易に答えを出して満足しないこと等々、正直遠回りで時間がかかりますが、そういったことを粘り強くするようにしました。今、少しずつですが、選手同士の活発な意見交流があり、選手自ら「ハードワーク」を求めていく、そういう集団になりつつある、と手応えを感じています。

今のやり方が「正しい」のか、今はわかりませんが、最適解には永遠に至らないのではないかと思います。とはいえ、絶対的な正解がなく、予測不可能な変化が起これ続けるこの世界で、問題解決に向けて忍耐強く考え続けられる(そんな人間になれる)よう、選手も私もグラウンドで試行錯誤を続けておりますので、今後とも応援よろしくお願い申し上げます。

## 「基礎ほど大切なものはない」

池田 航生

まず最初に、私がキャプテンとしてこのラグビー部で過ごした日々を振り返り、心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。

ラグビー班に入ってまもない頃は未熟で大した熱量もなくラグビーをしていましたが、後輩が入ると共に自らのプレーに責任感を持つようになり、プレーでチームを引っ張れるようになりたいと考えるようになりました。得意なプレーを増やしたり、増量をしたりと個人レベルでのレベルアップを図りました。精神的に追い込まれてラグビーへの熱が全くなくなってしまったこともありましたが、その困難を乗り越えられたのは紛れもなくチームメイトのおかげだと思います。

私はキャプテンとして膳所高だけでなく合同チームのキャプテンも務めました。すでにコミュニティができている合同チームをまとめることの難しさを実感しました。時にはうまくいかないこともありましたが、そのたびに反省し、改善しようと努力する中で、チーム全体が成長していくのを感じることができました。

合同チームにおいては私自身が何かできたことは多くはないですが、膳所高の人間が最終的にチームとしてなじめたことに安堵しています。

また、初心者ばかりのチームであることを鑑みて、高いレベルを求めるのではなく、基礎を徹底する大切さを同時に学びました。県内外のチームを見て技術的な面や体格的な面で劣っている私たちにとって彼らは尊敬や畏怖の対象であり、同時に羨望の存在でもありました。そんな中で自チームを見て、もっと彼らのように見栄えの良いプレーをしようとするのは傲慢で、基礎ほど大切なものはないのだと、戦うたびにつくづく思わされたのはこれからの人生において最も重要な教訓の一つとなると思います。

これからはそれぞれの道に進むこととなりますが、ここで得た経験や絆を忘れずに、次のステージでも力強く前進していこうと思います。最後に、これまで支えてくれた顧問の先生方、そして家族や応援してくれたすべての方々に心から感謝します。

ラグビー班キャプテンとして過ごした日々は、私の人生において最も貴重な時間でした。本当にありがとうございました。

## 「ラグビー」

山口 凜太郎

ふと思い返してみれば、先輩方の大きな背中を追っていた1、2年の頃がいちばん楽しく、日々が明るかったようにも思える。もちろん最高学年になり、チームを牽引する立場になっても楽しかったことは事実である。

でも、チーム作りなどがうまくいかずにもどかしい気持ちになったことも多々あり、同期ともめたことも数多くあった。合同チームになってしまったどうしようもない思い、自分たちの思い描くラグビーがしたい、そういった意味で過去のチームに対するノスタルジーを感じていたのだと思う。その中で一緒にがんばってくれた仲間たちには感謝してもしきれない。

また、自分たちが秋まで残るといふ決断に踏み切れなかったからこそ、秋まで続けるという決して簡単ではない決断をした先輩のすごさを3年生になって、強く感じた。正直、春でやめたことに全く後悔はしていないし、現役で第1志望に受かったという結果があつてこそだが、秋まで続けようとした自分を止めた親に感謝すらしている。

ただ、ラグビーは好きだし、嫌いでやめたわけではないので、何かしら人生を通して関わっていきたいと思っている。

そう思わせてくれる「ラグビーの力」を改めて実感する。ラグビーには人を惹きつける力がある。血と汗と涙を共に流した仲間は友人という枠を大きくはみ出した、第2の家族とも言うべき存在になっている。受験期を過ぎ、久しぶりに全員で集まった時も、あの時と変わらず笑い合うことができた。きっと、10年後またその先も同じように集まると信じている。同期8人のことがこれからも大好きです。最後になりましたが、支えてくださった先生方、水野さん、のりさん、OB、OGの方々、保護者のみなさん本当に3年間ありがとうございました。

## 「アツい部活」

田中 要輔

高校に入った時にはまさか膳所ラグビー班に入るとは思っていなかった。中学の部活は相手との接触があるスポーツだったので、タックルのあるラグビーという競技自体に抵抗はなかった。しかし、体格が優れているわけでもなく、なにより練習が多いという噂が聞こえて、やっつけていけるかとても不安だった。そんな私でも重い腰を上げてラグビー班に入ることができたのは、やはり班員や先生の熱意に動かされたからである。特に一つ上のある先輩は放課後、私のクラスの前で待ちかまえていたからとても驚いた。

膳所ラグビー班に入って最も印象的だったのは班全体のアツさである。練習から声出しも積極的で、フルコンでは試合さながらの本気さがある。多様なセットプレーもあり、試合後も課題分析・解決に向けてのミーティングも行われていて、勝利へのチームの一体感がとても頼もしかった。そして練習が終わるとアットホームな雰囲気です学年の垣根なく関わり合っていた。

中学時代に私は部長をしていたのだがチーム作りに苦戦し、膳所ラグビー班のような雰囲気にとってもあこがれがあった。このような環境が最初からあったのはとても恵まれていたのだなあと思ってしまう。

正式にラグビー班に入部したのは1年の3学期末であったが、そこから引退するまでの1年強は高校生活で最も充実したものであったと思う。河崎君も同じくらいの時期に入部したのも心強かった。彼は私とは対照的にいい意味でズカズカと輪の中に入っていき強さがあり、彼のおかげで自然に打ち解けていくことができたので感謝している。

膳所ラグビー班に入ってよかったとつくづく思う。入るまでの自分と今の自分とでは肉体系、精神面ともに大きな変化もあったし、珍しい体験や人とのつながりなど、帰宅部のままではきっと得られないものが多くあった。これからも様々な集団に属する中で、自身の軸を持って役割を担っていけるようになりたい。

最後になりますが、森先生、高田先生、水野コーチ、中村さん、その他関係者の方々、家族の皆様、ありがとうございました。

## 「繋がり」

中村 湖夏

この文章を書くにあたり、改めて3年間を振り返ってみると、ラグビー班があったからこそその高校生活だったと思います。これを一番感じるのは、3年間で得ることができたさまざまな人との繋がりです。

一緒に活動した先輩方や後輩たち、練習や試合に顔を出してくださる OB、OG の方々、先生方、水野さん、のりさんはもちろん、他校の方々や班員のおかげで仲良くなれた学校の友だちなど数えきれない人と関わることができました。膳所高校として単独での公式戦への出場が最も良いことですが、合同として活動したことで今まで以上に他のチームの選手やマネージャー、先生方と関わったのは大きな経験でした。ラグビー班に入っていないと知り合えていなかったと思うと、3年前の選択は大正解だったなと感じます。

そしてなにより、同級生の7人と出会えたことが本当に大きいです。全員個性が豊かすぎるので、絶対に部活を通してじゃないと知り合わなかったメンバーだと思います。当初は私含め5人しかいない学年でしたが、水泳班とかけもちで来てくれたり、地道な勧誘活動が実ってか、1年の3月に2人入ってくれたりして、最終的には8人になりました。

私自身マネージャーとして活動して、先輩や先生方から教えてもらいながら、練習や試合の状況に意識を向け、何ができるか考えて柔軟に対応できるようになったり、いろいろな人に対して積極的にコミュニケーションを取れるようになったりと成長できたと思う部分はいくつもあります。

経験やアドバイスなどがあって成長したのはもちろんですが、3年間チームのために頑張ろうと思えたのはみんなのおかげです。

選手とマネージャーは違うし、壁ができてしまうのかなと思っていましたが、仲間として接してくれ、支える側のわたしをそばで支えてくれました。だからこそ、みんながプレーしやすいように何かできることはないかを常に考えられるようになったと思います。

みんなが笑顔でいてくれたらいいなと思いながら部活に参加してました。こんなにも何か、誰かに強い思いをもったことは初めてだったし、みんなといるとずっと自然体でいられました。毎日部活のために学校に行っていたと言ってもおかしくないくらいです。

マネージャーにできることは選手と比べて少ないですが、チームを客観的に見られる立場として、このチームの雰囲気良さやたて、よこ両方の繋がり深さを誰よりも感じることもできたと思っています。

カメラロールにはマネージャーだから撮れた写真であふれています。この3年間マネージャーという立場で膳所高校ラグビー班に携わることができて本当に良かったです。いろんな人と関わる毎日は刺激的で、今までで一番濃い時間を過ごせました。

最後になりましたが、支えてくださった先生方、水野さん、のりさん、OB、OG の方々、保護者のみなさん本当に3年間ありがとうございました。

## 「選択」

北原 幸太郎

ぼくはこの膳所高校で過ごした3年間で、たくさんの思い出を作ることができ、またさまざまな経験を積むことができた。その中で、最もぼくにとって意義深かった経験は、間違いなく、膳所高校ラグビー部で過ごした日々だ。長々としてしまうと思うが、感慨に浸りながら、3年間を振り返りたいと思う。何の脈絡もない文章になることをご容赦願いたい。

入学直後、高校でラグビーを始めるつもりは毛頭なかった。だけど、中学時代の先輩が所属していたことに加え、野球しか経験がなかったぼくには、ラグビーの自由度、柔軟度の高さは大変魅力に感じた。なんだかんだで始めたラグビー、途中でさまざまな苦難に直面した。

初めて楕円球に触れ、右も左も分からないまま出場した1年春季総体では、パッションや、燃え盛る炎のような、今まで感じたことのない高揚感を体験し、ラグビーの魅力に気づいた、僕の高校ラグビー人生にとって重要なワンシーンになったことは確かだと思う。

1年秋季総体には、宿敵八幡工業に大敗したが、全員が一丸となってとったあのワントライもまた生涯忘れることのないワンシーンだ。

総体後、ハーフに転向することとなった。ここで、ラグビー人生で最も重要な出会いをした。佐藤さんとの出会いだ。

経験の浅いぼくに、全体練習が終わった後も練習に付き合ってください、ハーフとしてどこに着目すべきか、どうポジショニングすべきか、どういう指示を送るべきか、などなど、本当に全てを教えてくださいました。と同時に、戦術のウラオモテ、そして尽きることのない探究性といった奥の深さも教えてくださいました。本当に感謝してもしきれない方だ。佐藤さん、本当にありがとうございました。

新チームの初陣として迎えた、近畿公立大会。天然芝に一部土、そして雨という決していいとは言えない環境もあり、パスミスを連発してしまった。不甲斐なさに思わず涙してしまった記憶がある。この経験がぼくをさらにラグビーへ熱中させるきっかけとなった。

チーム加藤春季大会後、キッカーに任命され、さらに練習をするようになった。誰よりも練習した、そういう自負もある。だけど、うまくいかなかった。コンディションに波があったり、自分の型が揺らいでしまった時期もあった。しかし、いろいろな人にアドバイスを求め続け、あるアドバイスをきっかけに安定した。迎えた3年春季総体。春引退か秋引退かを決めていなかったが、とにかくやり切ろう、そう思っていた。

結果として、キックを全て成功させることができた。怪我で最終戦5分のみのお出場だったが、執念でコンバージョンを成功させたことは大いに自信になった。「やり切った」これがぼくが最初に思ったことだった。

そこから受験勉強に集中したが、結果振るわず、京都大学合格という目標を達成できなかった。

ラグビーから得たもの、それは、ズバリ決断力、実行力、だと思う。決してベストなコンディションや環境でなくても、たとえどれだけ劣勢であっても、その状況でベストだと思われる選択をする。振り返ってレビューし、修正する。結果に執着することなく、そのプロセスを、ただひたすらに分析する。そこにはたださらなる成長への向上心のみが存在する。

ぼくは、浪人という選択肢もあったが、結局、ご縁があった大阪公立大学に進学することにした。この

選択が正しかったのか、本当に後悔しないのか、などなどまだモヤモヤが消えることはない。何が最適解かは誰にもわからないし、存在しないかもしれない。長い人生を過ごす中で、都度最善だと思われる選択をし、分析する。そして、必要があれば修正する。そのプロセスに恥じらいは必要ない。そんな堂々とした、自分の一度きりの人生を楽しみたい。ラグビーを経験し、さまざまなことを得た自分だからこそできると信じてやまない。

最後になりましたが、森先生をはじめとした先生方、水野コーチ、一緒にラグビーをしてくれた先輩、後輩、そして同期、合同チームのみんな、OBの方々、佐藤さん、そして、高校ラグビーをする中で関わったすべての方々、本当にありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

## 「ラグビーとの出会いがもたらしてくれたもの」

宮田 瑛心

「ラグビーに出会えて本当に良かった」。ありきたりではあるものの心の底からそう思う。

私は3歳から水泳一本で放課後も友達と遊ぶことなく、中学卒業まで週7で練習に励んできた。もちろん高校でも深く考えることなく水泳班に入部し、1年から近畿大会のリレーメンバーに選んでいただいたりと自分の中でも充実した水泳生活を送っていたと思う。

そんな私がラグビーと出会ったのは1年の秋であった。部員不足で単独チームが組めないという事情を聞き今まで個人スポーツのみで生きてきた自分の中に、密かにやってみたく感じていた集団スポーツの選択肢がふと現れた。もちろん、己の肉体をぶつけ合う世界に、ルールも分からないと素人が入っていくことに少なからず戸惑いや不安もあった。しかしそれ以上に好奇心が勝ったのだろう。ラグビーという世界に「助っ人」という形で思わぬ参戦をした。

15人ギリギリの単独チームのため、スクリーンパスもままならない入部すぐ、雪の降る瀬田工グラウンドで試合に出た。開始10分、ボールをもらいそれほどゲインできないうちに倒された。右腕にかすかな痛みを感じた。深く気にせず最後まで分からないなりに全力でやり切った。試合が終わると右腕がとてつもなく痛くなりだした。診察の結果は骨折だった。また、凍ったグラウンドのために右手側面が血だらけになっていた。これが私の一生記憶に残るデビュー戦となった。

こんなに散々な結果であったのになぜラグビーを続け、まして2年の夏に水泳班に戻ったその秋、呼ばれてもないのになぜラグビーに戻って来たのか。理由は明確で、単純に「ハマってしまった」。ただそれだけである。ラグビーが想像以上に楽しすぎた。ただそれだけだ。

今振り返ると、どちらの部活に対しても失礼で無責任なことをしたと思っている。3年間をラグビーに捧げ、練習に励むみんなにもすごく失礼な行動をしていた。それでもラグビー班に帰ってきた時は「おかえり！」と先輩含めメンバー一同が笑顔で迎え入れてくれ、初めは「こいつ誰やねん」といった様子の後輩達も他の同期と同じように慕ってくれいじってくれ、そして何よりも同期が本当に仲良くしてくれた。だからこそラグビーを心の底から楽しめたと思う。本当にありがとう。

本音を言えば、この世界に気づかずに何も考えることなく、水泳班を選んだ自分を後悔する時もあった。なぜこんなにも楽しい世界を知らなかったのか。ラグビーの一員として学年に見られたかった。ラグビー班のリュックを背負いたかった。ラグビー班のジャージを着て試合に行きたかった。

もちろん、水泳班にいたことで近畿大会も3年出場でき、仲間にも出会い、数々の経験ができたことは確かだから水泳班を批判している訳ではない。むしろこんな行動を認めてくれた水泳班には感謝してもしきれないほどである。

ただラグビーをしている時の自分が好きだったし、集団スポーツという世界に出会えてラグビー班にも感謝が尽きない。

それほどラグビーが好きだったことは伝わっただろうか。こんな2部活をウロウロするようなやつのは参考にしにくいかもしれない。だからこそ伝えたいことは「心の底から今していることを楽しんで欲しい」。

ラグビー班のみなさん、OBのみなさん、合同チームのみなさん、そして森先生、本当にありがとうございました。

## 「部員勧誘継続中です」

現役主将 丸木 友

ラグビー班キャプテンの丸木友です。

現在私たちは3年生5人、2年生7人、1年生5人の選手と3年生、2年生のマネージャー1人ずつの計19人で活動しています。

今年度は全国大会予選に単独チームとして出場できることとなり、ラグビー班OBの皆様が築かれた伝統と誇りを受け継ぎ、Z.R.F.C.として闘えることをうれしく思います。しかし、3年生が引退すると来年の春季総体では合同チームでの出場となるため、まだまだ勧誘を続けていかねばならないのが現状です。OB会の皆様には、様々な方面でのご支援をして頂き感謝してもしきれません。

昨年のマスターズ花園を観戦し、怪我をしながらも最後までフェアプレーの精神で戦い抜かれた姿を見て、ラグビーにかける思いの強さを感じ、我々も背中を押されました。皆さんに頂いた勇気を胸に、秋季総体にチーム一丸となって挑みますので、どうぞこれからもご支援よろしくお願いします。

## 2024 年チーム戦績

### 県民体育大会(近畿大会予選)

1回戦	合同 A	14	—	14	合同 B	( 1/14	希望ヶ丘 )
準決勝戦	合同 A	0	—	121	光泉カトリック	( 1/21	希望ヶ丘 )

### 近畿公立高校大会(中止)

### 7人制大会

1回戦	膳所	34	—	5	瀬田工業	( 4/20	希望ヶ丘 )
準決勝戦	膳所	0	—	71	光泉カトリック	( 4/21	希望ヶ丘 )
3位決定戦	膳所	0	—	22	比叡山	( 4/21	希望ヶ丘 )

### 春季総体

1回戦	合同 A	14	—	12	合同 B	( 5/26	希望が丘 )
準決勝戦	合同 A	0	—	112	光泉カトリック	( 5/30	希望が丘 )
3位決定戦	合同 A	17	—	26	比叡山	( 6/2	希望ヶ丘 )

### 秋季総体(全国大会予選)

1回戦	合同	55	—	10	玉川	( 10/31	希望ヶ丘 )
準決勝戦	合同	0	—	117	光泉カトリック	( 11/10	皇子山 )

表示タイトル:高田達先生直筆

表紙カット:松村秀明氏

発行日:2025年10月15日

発行元:膳所高等学校ラグビーオールドボーイズ倶楽部

※紙面の都合上、発行元により校正を行っております